

アルゼンチンアリの生息状況モニタリング調査及び防除手法についての検討（第1報）

○山田由貴

1. はじめに

特定外来生物のアルゼンチンアリ (*Linepithema humile*) は南米原産で、貿易に伴い世界各地に生息範囲を拡大している。アルゼンチンアリは、壁のひび割れや鉢の下などあらゆる隙間に巣を作り、電気製品に侵入して不具合を生じさせるなど、日常生活等に大きな被害を及ぼすため、防除により定着を防止する必要がある。

愛知県内においては、2005年に侵入が確認されており、防除が行われているが根絶に至っていない。これは、アルゼンチンアリの防除に対する反応等、侵入地におけるアルゼンチンアリの生態が十分に把握できておらず、防除を効果的に行えていないことが主な理由である。

本研究では、アルゼンチンアリの効果的な防除に資するため、今年度、アルゼンチンアリの特性を把握するための生息調査を行っているので、その概要について報告する。

2. 方法

調査は、2015年3月にアルゼンチンアリの侵入が確認された東海市内で実施している。

アルゼンチンアリの生息状況を把握するため、ベイトトラップ（25%ショ糖水を含ませた脱脂綿を設置）による調査を行っている。また、防除に対する反応等アルゼンチンアリの行動観察を行った。

3. 結果

調査で確認した、着目すべきアルゼンチンアリの特性を2例報告する。

夏季の調査で、日なたと日かげで地表活動しているアルゼンチンアリの数に違いが観察されたことから、日なたと日かげに設置したベイトトラップへ集まったアルゼンチンアリの個体数を比較したところ、日なたの個体数の有意な低下がみられた（図1）。このことから、夏季にアルゼンチンアリを的確に検出するためには、日かげになる時間帯に調査を行うなど、設置環境に配慮すべきだと考えられる。

アルゼンチンアリの巣穴に液剤（有効成分：フィプロニル）を噴射したところ、女王アリが脱出し新たな拠点を作る行動が観察された（図2）。このことから液剤散布のやり方によっては、有効成分を女王アリや働きアリに接触させることができず、期待される効果が出ないことが推察される。

今後は、効果的防除手法を検討・実施し、生息状況モニタリング調査による経年データの蓄積・分析を行っていく。

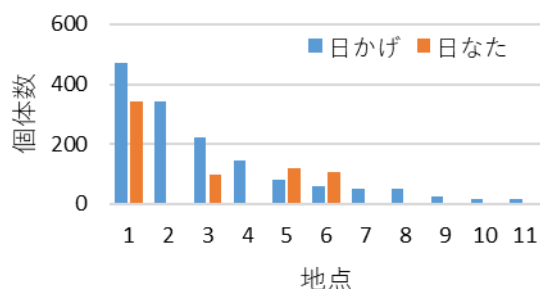


図1 ベイトトラップへ集まった個体数の比較
(2022年8月9日)



図2 液剤散布した巣穴から脱出するアルゼンチンアリ
(中央左の大きい個体は女王アリ)